

第68回日本生殖医学会学術講演会・総会

O-093

金沢 2023.11.9-10

胚移植前に経腔的嚢胞穿刺術を実施し妊娠に至った嚢胞性子宮腺筋症の1例

岡村直哉<sup>(1)</sup>、福田愛作<sup>(1)</sup>、上田匡<sup>(1)</sup>、庄野真由美<sup>(1)</sup>、重田護<sup>(1)</sup>、高矢千夏<sup>(1)</sup>、  
江原千晶<sup>(1)</sup>、辻勲<sup>(1)</sup>、藤岡聡子<sup>(1)</sup>、森本義晴<sup>(2)</sup>

1) 医療法人三慧会IVF 大阪クリニック

2) 医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

#### 【緒言】

嚢胞性子宮腺筋症は子宮筋層内に子宮内膜症性嚢胞が存在する病態で、子宮腫瘍の0.35%と比較的稀である。本邦でも症例報告は少なく、治療方針についても一定の見解が得られていない。我々は、嚢胞性子宮腺筋症合併不妊患者に体外受精を施行し、胚移植前に経腔的嚢胞穿刺術を行い妊娠に至った症例を経験したので報告する。

#### 【症例】

27歳, 0妊0産。17歳より前医にて嚢胞性子宮腺筋症を指摘されていた。月経困難症が強いためジェノゲスト投与にて保存的に加療されていた。27歳時に挙児希望のため、ジェノゲストを中止したが、嚢胞の増大と月経困難症の再燃により前医にてジェノゲストが再開され、不妊治療目的で当院へ紹介となった。初診時の超音波検査にて、子宮右側壁筋層内に5cm大のチョコレート嚢胞様腫瘍を認めた。治療方針として手術療法後のARTとARTに保存的治療の併用とについて説明し患者は後者を希望した。プロゲステロンを用いたPPOS法にて体外受精を実施し採卵数23個、胚盤胞を12個凍結保存した。嚢胞による圧排で子宮内膜の同定が困難であったため、インフォームド・コンセントのうえ経腔的嚢胞穿刺術を施行後に自然排卵周期凍結融解胚移植を試みた。穿刺後、嚢胞は2cm大まで縮小し子宮内膜は明瞭に同定できるようになり、嚢胞による子宮内腔圧排は消失した。初回の胚移植は生化学的妊娠に終わった。2回目の胚移植で臨床妊娠が成立し胎児心拍出現、現在妊娠9週となり、嚢胞の増大もなく順調に経過している。

#### 【結論】

嚢胞性子宮腺筋症により子宮内腔変形を伴う不妊症は治療困難である。根治的治療として嚢腫摘出術があるが、子宮内膜穿破や妊娠時子宮破裂のリスクがあり、また術後数ヶ月間の待機期間が必要となる。今回、我々が実施した体外受精において経腔的嚢胞穿刺術後の胚移植による妊娠成立は本邦で初めての症例と考えられる。